

[研究ノート]

プロジェクトゼミ『映画でまちおこし』の地域へのインパクト

大 川 新 人

Community Impact of Project Seminar
“Economic Development focusing on Animation Film Location”

Arato Okawa

私は、2005年度の春学期、多摩大学で、プロジェクトゼミ「映画でまちおこし」を教えた。東京都多摩市聖蹟桜ヶ丘は、人気のあるアニメーション映画の舞台になっている。私と学生は、プロジェクトゼミのなかで、地元の商店街の活性化を目的としたこの映画の10周年記念上映会と関連イベントを企画・運営した。2005年7月に開催したこのイベントは、全国から、映画ファンが集まり、大盛況となった。そして、履修生と商店主に変化を与えた。地域活動と結びついた授業は、人と地域に元気を与えると考えられる。

In 2005 spring semester, I taught a project seminar “Economic Development focusing on Animation Film Location” in Tama University. Seiseki-Sakuragaoka, Tama is on location of a famous animation film. I and students planned and managed an independent film show and related events, sponsored by Sakuragaoka commercial strip, to celebrate the 10th anniversary of this film in the seminar. In July 2005, 2000 fans of the film from all over Japan rushed to the events. In the process of planning and managing the events, students and merchants changed by themselves. In conclusion, I think that a seminar linked with community activity not only stimulates students and residents but also develops community economically.

コミュニティビジネス、まちおこし、商店街の活性化、大学と地域の連携、プロジェクトゼミ、多摩市、聖蹟桜ヶ丘、アニメーション映画

Community economic development, Commercial strip development, A collaboration between university and community, Project seminar, Tama, Seiseki-Sakuragaoka, animation film

(原稿受領日 2005.11.2)

章 プロジェクトゼミ「映画でまちおこし」とは

1 節 プロジェクトゼミ「映画でまちおこし」の概要

私は、2005年度の春学期、多摩大学で、プロジェクトゼミ「映画でまちおこし」を教えた。プロジェクトゼミは、講義中心からゼミ中心へ

のカリキュラム改革の一環として誕生した。教員と学生が一緒になって、1つのプロジェクトを企画・実行するものである。

多摩市聖蹟桜ヶ丘を舞台にしたアニメーション映画がある。この映画は、中学3年生の女子生徒の心の成長を描いている。多摩大学3年生の鴨川美紀さんは、この映画が好きで、多摩大学に入学したというほどのファンである。鴨川

さんから、「この映画の10周年記念上映会を開催したい」という提案があり、それを受けて、プロジェクトゼミのなかで、10周年記念上映会と関連イベントを一緒に企画・運営することになった。鴨川さんは、ボランティアのティーチングアシスタントとして、履修生のサポートをしてくれた。23人の2年生がこの授業を履修し、企画・運営を担当した。

2 節 授業をまちおこしと連動させる

「映画でまちおこし」の最大の特長は、授業をまちおこしと連動させたことである。つまり、大学の授業は、通常、大学のなかではじまり、大学のなかで終わる。その成果は、学生が知識を取得することである。

一方、この授業は、学生が、まちに繰り出て、まちの人と一緒にイベントを開催する。そして、学生が、汗をかくと同時に、多くのお客さんを集めて、まちの活性化に貢献するという趣旨である。全国から集まっている多摩大学の学生は、都心のほうに目がいってしまって、地元の多摩市への関心が薄い。多摩市民から、まちのなかに、学生の姿が見えないという話をよく聞く。そこで、多摩市の地域活動に関心を持ってもらいたいと思い、地域活動という視点を取り入れた。この授業の成果は、まちが元気になることである。授業を地域活動と結びつけたので、いままでにない新しい種類の授業といえるだろう。

章 「映画でまちおこし」プロジェクトにいたるまでの活動

1 節 クリーブランドで見たアートによるまちづくり

私は、大学卒業後10年間勸角証券（みずほインベスターズ証券）に勤めた。個人営業、証券アナリスト、株式投信のファンドマネージャー

などを務めた。山一証券の倒産など証券不況のとき、新しい世界で働きたいと思うようになった。1997年、多摩大学大学院修士課程に入学し、コミュニティビジネスやNPOのマネジメントを研究した。

多摩大学大学院修了後、この分野についてもっと勉強したいと思ったが、日本ではなかった。そこで、米国の大学院に留学することを決意した。

1999年から2001年の2年間、米国オハイオ州クリーブランド市のケース・ウェスタン・リザーブ大学大学院マンデルセンター・フォー・ノンプロフィット・オーガニゼーションズで、NPOマネジメントの専門コースに留学した。このコースは全米のモデルコースとして知られているMBAのNPO版といえるもので、NPOの経済学、NPOのマーケティング、NPOの会計など、NPOマネジメントに必要な知識を広く浅く学べる実践的なカリキュラムになっている。私は、NPOのマネジメントのなかでも、コミュニティデベロップメント（コミュニティの経済開発）を学んだ。なぜならば、コミュニティ開発法人は、コミュニティビジネス（和製英語）の源流だからである。

クリーブランド市は、20世紀初頭、鉄鋼業で栄えた重工業都市である。しかし、1970年代、鉄鋼業は、海外との競争に破れ、工場閉鎖が相次いだ。その結果、1978年に、クリーブランド市は、財政が破綻し、デフォルトを宣言した。しかし、その後、地元の経済界の協力のもと、財政再建を果たした。そして、観光業が新しい産業の担い手の1つとなった。なかでも、芸術NPOによる観光客の誘致が功を奏した（注1）。日本では、アートは国や自治体に取り組む金食い虫だと思われる。しかし、欧米では、民間の芸術事業は、コミュニティの経済開発の1つの手段として、脚光を浴びている。

たとえば、火事にあい、取り壊し寸前だった中心市街地にある劇場街を、市民の力によって再建し、年間100万人が訪れる観光地に生まれ変わらせた。そして、財界が、NPOが運営するロックンロールの殿堂と博物館を誘致し、 لندنとの直行便を開通させた。その結果、2000年までの6年間でクリーブランド市に訪れる観光客を900万人と倍増させることに成功した。アートによる地域経済開発を多摩市で実践したと考えた。

2 節 多摩大学総合研究所コミュニティビジネス研究センターの活動

私は、2001年に帰国後、NPOやコミュニティビジネスのコンサルタントとして活動をはじめた。そして、2003年6月に、多摩大学の望月照彦教授の協力を得て、多摩大学総合研究所コミュニティビジネス研究センターを設立した。私は、客員主任研究員に就任し、多摩市や多摩ニュータウンを元気にする活動を開始した。

現在、コミュニティビジネス研究センターの活動の柱は3つある。1つめは、調査・研究である。毎月、平日の夜、永山公民館で、地元でコミュニティビジネスを実践している人の話を聞くコミュニティビジネス研究会を開催している。2つめは、教育（人材育成）である。永山公民館と共催でコミュニティビジネス起業の市民講座を開催している。3年目の2005年度は11月から2006年1月まで全6回開催しており、10人の市民が参加している。

3つめは、活動支援である。実際、どんぐりパン（多摩市にある知的障害者が働く小規模作業所）の経営をサポートしている。

このような活動をするなかで、人脈を広げ、今回のプロジェクトゼミ「映画でまちおこし」へと発展させることができた。

章 「映画でまちおこし」の授業

1 節 授業の内容

「映画でまちおこし」の授業は、講義、フィールドワーク、グループワークという3本の柱で構成されている。

1つめの講義は、私の講義と外部講師の講義があった。まず、私の講義は、米国のアートによる地域経済開発についてである。前述した章1節のクリーブランドのアートによるまちづくりの事例を紹介した。ある学生は、「まちづくりは行政がやるものだと思っていた。多摩市は財政難なので、まちおこしができないと思った。しかし、米国の事例を見て、お金がなくても、志や情熱があれば、まちおこしができると勇気づけられた」と語っている。このように、日本では、まちづくりが、行政がやるものだと思われる。その意識改革が少しでもできればと願っている。

つぎに、地元で活躍する2人の外部講師を招いて、まちのシンボルとしてのキャラクターを使ったまちづくりについて話してもらった。1人めは、NPO法人フュージョン長池の富永一夫理事長である。アニメーション映画のためきを使ったまちづくりの事例を話してもらった。2人めは、多摩市役所多摩センター活性化推進室の渡辺龍一室長である。キティちゃんの街・多摩センターの取り組みを話してもらった。学生にも好評で、映画による聖蹟桜ヶ丘のまちおこしの参考になったようだ。

2つめのフィールドワークは、映画のなかで使われている場所（片道1.5キロメートル、往復3キロメートルの道のり）を商店街の人と一緒に歩いた。ロケ地ツアーチームが、お客さんを案内するときの参考になった。

3つめのグループワークは、23人の履修生が6チームに分かれた。商店街とアンケート、

広報、販売促進と観客集め、記録、ロケ地ツアーの企画・運営、背景画展の企画・運営である。チームリーダーを中心にイベント本番に向けて準備を進めた。

7月の映画上映会と関連イベント（ロケ地ツアーと背景画展）は大盛況のうちに終わった。そして、それが、波紋を広げ、変化をもたらした。

章 映画上映会が起こした変化

1 節 履修学生の変化

履修生は、授業の当初、受け身の人が多かった。しかし、授業が進むにつれて、やる気を起こして、自分から積極的に行動を起こす人が増えた。履修生が、イベント当日、朝から晩まで、一所懸命に働いてくれた結果、イベントを成功させることができた。「地域活動に関心を持ってもらう」という目標を達成できたかどうかは不明である。今回は、きっかけを与えることができたが、長い目で見て、地域との接点を持たせるようにしたい。ただし、地元出身の男子学生には地域活動に関心を持ってもらえた。多摩市の中学校でインターンをして単位が取得できるという制度に関心を持ち、来年度に履修したいと話してくれた。学生は、単位取得などのメリットがあれば、地域活動に取り組みやすくなると考える。

2 節 地域の変化

地域の変化は2つある。「商店街」と「地域住民」である。

1つめは、「商店街」。多くの商店街は、高齢化が進むと同時に、郊外型ショッピングセンターにおされて、元気がない。多摩市の聖蹟桜ヶ丘駅前の商店街は、比較的、お客さんがはいっている。桜ヶ丘商店会連合会は、地元の商店と駅前の百貨店・量販店やショッピングセンター

が、共存共栄をはかっているからである。この連合会は、個人商店の人が会長をしており、まちのにぎわいの演出に取り組んでいる。しかし、毎年、駅前で、開催するイベントも、マンネリ化していて、お客さんの入りも頭打ちになっていた。

まちづくりに取り組む商店街の店主には2つの特徴がある。1つめは、商店街の人はまちのよさを知らないことが多いこと。実は、商店街の人の多くは、この映画の存在を知らなかった。地元を題材にしたこんなすばらしい映画があるのかと驚いたりした。2つめは、商店街には、地域のなかで、いろいろなしがらみがあって、新しいことをはじめにくい雰囲気があること。逆にいえば、商店街の人は、外部の人の企画には、乗りやすい。大学や大学生は、営利目的ではなく、純粋な気持ちで取り組んでくれるので、提案を受け入れやすいというメリットがある。

そのなかで、多摩大学の学生による「映画でまちおこし」プロジェクトは、大歓迎された。若い人の熱気とアイデアが、まちの活性化に役立つと考えたからである。そして、7月のイベントは、商店街の人に自分たちもやれるという自信を与えたようだった。商店街の人がやる気になり、2005年12月に映画のロケ地という地域資源を使ったイベントを企画・開催することができた。

2つめは、「地域住民」。イベント会場に置いたノートには、今回のイベントを通して、「自分の住む桜ヶ丘のまちに誇りをもつことができた」というコメントがあり、うれしかった。まちづくりの原点は、住民が、「コミュニティ・プライド」を持つことから始まる。それが、一部にせよ、達成できたのは、よかったと思う。

章 教訓と今後の展望

1節 教訓

「映画でまちおこし」で得た10の教訓は以下の通りである。1～6が、授業やプロジェクトマネジメントについて。7～10は、まちづくりやまちおこしについてである。

- (1) 学生は、単位取得などのメリットがあれば、地域活動に取り組みやすい。
- (2) 教員と学生を仲立ちする学生がいると、プロジェクトを実行しやすい。
- (3) イベント開催の予算がないときは、外部資金を活用する。
- (4) 地域に根ざした団体とのパートナーシップを組むと、活動に広がりがある。
- (5) 地域の無料の公共施設や住民ボランティアなどを使えば、低予算でできる。
- (6) マスコミやインターネットを活用すると、効果的な広報ができる。
- (7) まちに長く住んでいる人より新しくやってきた人のほうがまちのよさを知っている。

(8) 商店街の人は、信頼関係を築けば、一緒に、まちづくりに取り組んでくれる。

(9) まちおこしは、シンボルをつくれば、心を1つにして、力を結集することができる。

(10) 人気のあるアート作品を使ったまちおこしは集客効果がある。

2節 今後の展望

まちおこしは、長い年月をかけて、取り組んで、はじめて成果が上がる。コミュニティビジネス研究会(著者が代表)は、公益信託多摩まちづくりファンドの助成金15万円を得て、2005年10月から2006年3月まで、毎月、会議を開いている。映画を使った「観光まちづくり」について、桜ヶ丘商店街の人や多摩市役所の職員や多摩青年会議所の人や多摩大学の学生と話し合っている。そして、事業計画をつくり、2006年度の商店街の予算に反映させる。今回のイベントを継続させて、かたちのあるものにしたいと考えている。

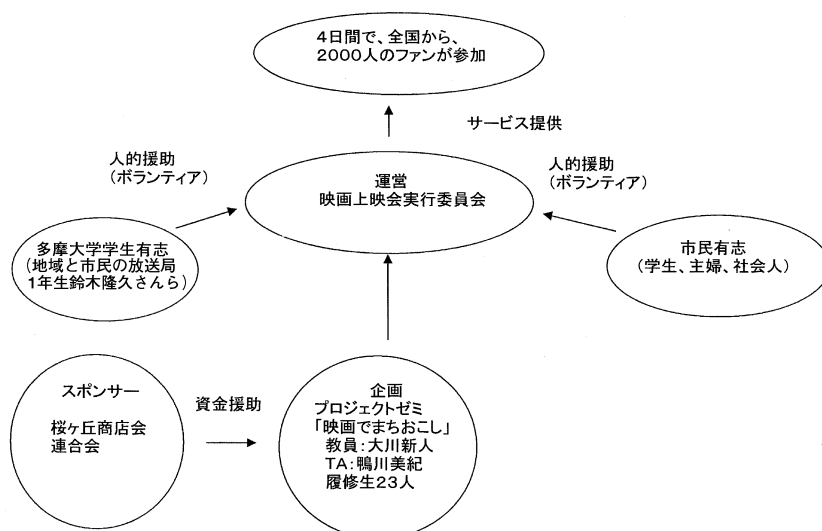


図1 (Fig.1)

注

(注1)米国のNPOの定義は、日本よりも広く、日本の財団法人、社団法人、医療法人、社会福祉法人、学校法人が含まれる。米国には、NPOによる美術館や博物館がたくさんある。著者の『NPOの活用と実践～夢と志の市民プロジェクト～』(2001年10月、日本地域社会研究所)に詳しい。

参考文献

『富と活力を生む!コミュニティビジネス～地域・市民の夢と経済を実現する!～』(大川新人+コミュニティビジネス研究会編、日本地域社会研究所、2005年3月)
『NPOの活用と実践～夢と志の市民プロジェクトおこし!～』(大川新人、日本地域社会研究所、2001年10月)

著者プロフィール

大川 新人(おおかわ あらと)

1965年、東京生まれ。学習院大学卒業後、証券会社に10年間勤務。その後、多摩大学大学院で、経営情報学修士を取得。さらに、米国オハイオ州クリーブランド市にあるケース・ウェスタン・リザーブ大学大学院に留学し、非営利組織修士を取得。現在は、コミュニティビジネスコンサルタント。多摩大学・明治学院大学非常勤講師。多摩大学総合研究所コミュニティビジネス研究センター客員主任研究員。著書に、『富と活力を生む!コミュニティビジネス～地域・市民の夢と経済を実現する!～』(大川新人+コミュニティビジネス研究会編、日本地域社会研究所、2005年3月)、『成功するNPO・失敗するNPO～NPO持続発展のマネジメント学習～』(大川新人、同、2002年12月)、『NPOの活用と実践～夢と志の市民プロジェクトおこし!～』(同、2001年10月)がある。日本NPO学会会員。